

業でやりたいとって、わざわざこの大川美術館に来たんです。大川さんや大川美術館に相当興味がないと来ませんよね。自分の力だけで美術館を作ろうとしているのはどのような人なのか、会ってみたかったですよ。

田中／いわゆるお金持ちが自分のステータスのために美術作品を見せる、ということではなく、あくまでも社会還元という意識がとても強かったんですね。

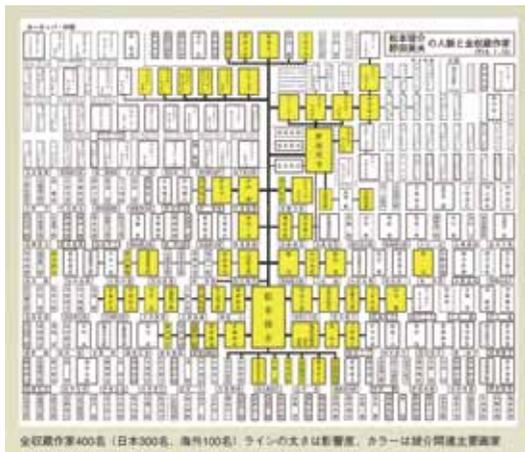
黒田／そうですね。大川さん最初のご著書『美の経済学』には、「まず美術愛好家から進むのだけれども、最終的には社会還元に行く。そういうコレクターが理想的だ」と書かれています。

【大川美術館開館】

田中／美術館が開館して、その後の活動に関して大川さんから相談を受けたことはありましたか。

黒田／私が大川さんに重宝されたのはもっぱらこのところでした。さらに、先ほどお話しした東京国立近代美術館の河北さん、岩崎さんにも聞くわけですよ。そのあたりは田中館長がお詳しいんじゃないですか。

田中／私は1983年に東京国立近代美術館に入りました。3年後の1986年に松本竣介展を担当したんですね。その前後だと思うのですが、当時課長だった岩崎さんに「見てご覧、こういうことを考える人がいるんだよ。」と見せられたのが、大川さん独自の相関図、手書きでした。



大川栄二「松本竣介 野田英夫の人脈と全収蔵作家」(パンフレット『近代絵画名品選—大川美術館コレクション』、財団法人大川美術館、2006年)

すでに大川さんは松本竣介のコレクターとしては有名でしたから、岩崎さんに言われて大川さんと美術館の近くの喫茶店でお会いしました。午後1時過ぎに行っただけですが終わって外に出たらもう夕方になってるんです。その間ずっとひたすら大川さんの話を聞いていました。それが一度や二度ではなかった。それくらい頻繁に岩崎さんのところへは顔を出しに来ていました。今思えばあの時すでに美術館づくりのことを相談していたんですね。

黒田／皆さん急に大川美術館ができたように思うかもしれないですけど、すでに『美の経済学』には書いてあるわけですから、大川さんの頭の中には、いつとはわからないけどいつかは美術館を、という考えがあったのかもしれない。美術館がいよいよ現実的になってきたときには、群馬県庁とやり取りをするなど、群馬の状況を知らなければならないので、私に相談されるようになりました。当時、群馬県立近代美術館の顧問をしてくださっていた河北倫明さんが、群馬県内のことなら黒田に聞くようにとおっしゃったようです。

【コレクションを築いた大川栄二の眼】

田中／大川さんの眼というところと言うと、私なんかは日本の近代美術が教科書的に身に沁みちゃっていますが、この作品はどうしても美術史の流れの中には入らないよな、という所蔵品が出てくるんです。その画家たちは公立の美術館のコレクションでは非常に少ない。調べてみると、夭折だったり、当時の美術界から距離を置いていたり批判されていたりするんですね。反骨精神、権威に対する批判精神、権威に汲みすることなく絵を描いた、あるいは若くして志半ばで亡くなった画家たち。今夏、「大川美術館ベストコレクション」という企画展を開催して、大川さんが眼を向けていた画家たちの共通点が見えてきたんです。その点、黒田さんはどうお考えですか。

黒田／本当にそうだと思います。大川さんは「絵は人格」といっていましたが、本当にそうですね。画家の人間性を見たいですね。誠実にひたすら絵のなかに自分の人生を

全部込めていこうという人を見ていましたね。

田中／生きている画家、美術家とのお付き合いについては、黒田さんから見ていかがでしたか。

黒田／大川美術館のコレクションを見ればわかりますが、ほとんどの方がすでに亡くなっていますので、現在活動している画家とのお付き合いはほとんどなかったと思います。最初のころオノサト・トシノブと交流があったようですが、お互い独自の路線を行く方でしたのでそれほど肌が合うというわけでもなかったようです。あとは女流作家の企画展をして、その出品作家の方々とはお付き合いがあったようですが、皆さん桐生出身の方ではないですから、それほど深いお付き合いはなかったと思います。お付き合いのあった芸術家といえば、私がわかるのは掛井五郎さん、新井淳一さんですね。

田中／新井淳一さんは大川さんのコレクションについて、特に松本竣介について、とても注目していたものがあったようですね。

黒田／《街》ですね。「大川美術館ができるとき、『《街》が桐生に来る』って淳ちゃんが大喜びしてくれた」と大川さんが言っていました。現在も看板として掲げられている大川美術館の題字は、新井淳一さんの字ですね。あれだけ苦労して作った美術館の題字をお願いしたのですから、かなり信頼があったわけですね。大川さんも桐生高等工業学校で染織を勉強し織維の専門家として三井物産に入社していますから、織維に対しては親しみを持っているし好きだったはずですよ。テキスタイル・プランナーという肩書の新井さんとも相通ずるところがあったのではないのでしょうか。

【今後の大川美術館】

田中／大川さんは一方で『母と子のための絵のみかた・たのしみかた』という子ども向けの本を出しています。現在、「こども×アート×まち」というテーマで子ども向けのワークショップを当館では実施していますが、大川さんが子どもたちに目をかけたように、これは今後の大川美術館のテーマにもなるのではないかと考えています。

黒田／大川さんは、子どもの段階から親しんでいないとなかなか文化にはなじめないといっていました。大川さんは美学美術史をちゃんと学んでいない、と謙虚にっていましたけれども、私たちが大学で学んだことも大川さんがやってきたことと同じです。ひたすら絵を見てみて、作者の話聞いて、そこから美術とは何かを学んでいる。

「逢いたいときにいつでも逢える名画の館」

これが最初から大川さんが掲げているこの美術館のキャッチフレーズですね。「この絵を持っている桐生市民の誇りを信じます。」とは、桐生タイムスに掲載された大川さんのことばです。絵を持っているということだけではなくて、この美術館をもっていることを桐生市民が誇りに思ってくださって、この美術館をく自分の「逢いたいときにいつでも逢える名画の館」にしていだけたらなと思います。

田中／私からもお願いをしますけれども、桐生という地域の中の大川美術館と捉えて頂ければと思います。個人美術館で大川って名前がついていますけれども、桐生市民のための美術館として、これからも桐生の子どもたちにこれを引き継いでいきたいと思っています。みなさんにもそういう風に思っていただければ本当に光栄だと思います。

黒田／私も今回の展示を改めてみますと、例えば東京国立近代美術館の常設の一角に来たのではないかというように、いくつかの美術館を次々と訪ねたような気がするくらい、本当にいい作品がたくさんあります。それを、桐生の人が「逢いたいときに逢える名画の館」にしなければなんとも勿体ないとおもいます。

(編集：池田寛子)

ワークショップで桐生を楽しむ

池田寛子

大川美術館開館 30周年記念企画「松本竣介 街歩きの時間」(2019年10月8日～12月8日)の関連事業として、「ひもかわ食べて街歩き」(11月4日)と「こども×アート×まち みんなの街をつくろう」(11月2日)を開催しました。

「ひもかわ食べて街歩き」は、美術鑑賞のあと、桐生名物ひもかわうどんを食べて元気に街歩きにでかけてもらおうと企画したものです。桐生市内にある手打ちうどん・石臼挽き手打ちそばの店しみずやの清水利信さんにご協力頂き、一日だけ特別にミュージアムカフェでひもかわうどんを提供しました。桐生市内にある DAY's DINING(デイズ・ダイニング)とコラボし、おからと豆乳を練り込んだ「山菜たぬきひもかわうどん」と群馬県産小麦を100%使用した「桐生おりひめうどん」の2種を販売。当日はお天気も良く、カフェテラスでギターの生演奏を聴きながらの開催となりました。



「みんなの街をつくろう」では、今までも何度かワークショップを企画して頂いている桐生市内在住のグループ small に企画して頂きました。白い紙を立方体に組み立て、展覧会のメインビジュアルとなっている松本竣介《Y市の橋》(1944年頃)をイメージした色合の紙の屋根をかけ、建物を作っていく紙クラフトです。立方体を何個組み合わせるか、どんな屋根をかけるかによっていろんな建物をつくることができま

松本竣介
街歩きの時間



2019.10.8 - 12.8
大川美術館

す。展覧会期間中いつでも自由に参加できるワークショップで、少しずつ来館者がつくった建物が増えて、街が変わっていく様子がうかがえました。展覧会の第2章では「桐生に「昭和モダン」を探す」として、桐生の街にある建物を紹介していたからでしょうか、ワークショップの街の中にも、ノコギリ屋根や西桐生駅など、桐生を感じる建物がいくつか建っていました。



こちらのワークショップには桐生市立西幼稚園の園児たちも参加してくれました。自分やお友達で作った建物だけでなく、他の来館者がつくった建物を見て感想を言い合ったり、すでにおいてある建物との兼ね合いをみてどこに自分のつくった建物をおくか考えたり、他に街に必要な建物は何だろうと考えてつくったり。美術館ならではの創作体験になったのではないかと思います。



展覧会で作品を鑑賞し、何かを感じたり新しいものの見方を知ったりする。その後、ミュージアムカフェで一息つきながら自分の考えを巡らせたり、ワークショップで自分でも表現してみたり。大川美術館がみなさんにとってくつろぎ、楽しめる場所になれば幸いです。

(大川美術館 学芸員)